

タイトル『ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、
ゴージャス!』14』

登場人物

- 剛田（ごうだ）..

ゴージャスな品物しか鑑定しない「剛田質店」の店主。優雅な所作と哲学を持ち、何よりも美を愛する。口癖は「ゴージャス!」で、価値観は極端に独特。周困には「クセが強すぎる」と思われているが、本人は全く気にしていない。

- 白金（しろがね）..

剛田質店の見習い鑑定士で、剛田とは対照的に常識人。神経質かつ心配性で、剛田の強烈なテンションや独特の価値観に毎度振り回されている。お宝そのものは大切に思うが、商売としての現実も気にしている。

• お客…

中年男性。祖父の遺品である「アメジスト製の包丁」を持ち込み、どう扱うべきか悩んでいる。剛田のゴージャス哲学に困惑しつつも巻き込まれていく。

第一幕：豪華な朝の始まり（20分）

（剛田質店の店内。豪華なシャンデリアの下、

剛田が紅茶を飲みつつ語る。）

剛田：「白金くん、見たまえ。この紅茶の色、この芳香。これがゴージャスというものだよ。」

白金：「（書類を片手に）剛田さん、いい加減にしてくれませんか？朝から紅茶の話ばかりしてないで、手伝ってくださいよ！」

剛田：「紅茶は朝の儀式だ。これなくして一日を始めることなどできない。」

白金：「儀式とか言って、ただの優雅な朝食

ですよ？こっちは今日来る予定のお客さんの確認してるんですけど。」

剛田…「お客の数など気にする必要はない。

我々が見るべきは、お宝の“質”だ。ゴージャスたる品物にこそ、我が魂は震える。」

白金…「魂が震えたところで、ちゃんと値段つけられなきゃ意味ないですけどね。」

剛田…「白金くん、それが君の悪いところだ。

美しいものには値段をつけるのではなく、その価値を感じるのだ。」

白金…「（皮肉気味に）ええそうですね。

でも、先月の“価値のある”品、全然売れてませんけどね！」

剛田…「売れなくてもいいのだ。それは私たちの手元にあるだけで、この店を輝かせる。」

白金…「（ため息）それじゃ商売にならないんですけど……。」

（突然、ベルが鳴り、剛田が急に立ち上がる。）

剛田：「来たぞ、白金くん！ゴージャスの予感がする！」

白金：「予感って……いや、普通にお客さんですからね。」

第二幕：謎のお宝登場（25分）

（包みを抱えた中年男性が入店。）

お客：「こんにちは。ちょっと相談したいことがあるんですが……。」

剛田：「ようこそ、剛田質店へ！さあ、あなたのお宝を見せたまえ！」

白金：「（内心の声）またテンション高いなあ……。」

お客：「えっと、これ祖父の遺品なんですけど……。」

白金：「（書類を片付けながら）どれどれ……」

おお、結構大きいですね。その包み。」

お客：「そうなんですよ。結構重くて……。」

も捨てるにはちょっと惜しい気もして。」

剛田：「捨てるだと！？なんと愚かなことを考えるのだ！」

白金：「いやいや、剛田さん、まだ中身見てないですから落ち着いて！」

剛田：「いいや、すでにこの包みに宿るオーラを感じている！」

白金：「オーラとかどうでもいいので、さっさと中身を見ましようよ！」

お客：「苦笑いしながら包みを開ける。」
「これなんですけど……。」

（紫に輝くアメジストの包丁が現れる。）

剛田：「……うん、ゴージャス！」

白金：「（驚愕して）いや、包丁じゃないですか！？しかも石でできてるし！」

お客：「祖父が集めてたもので……正直、使い道も分からなくて。」

剛田：「使い道など関係ない！この美しさ、見よ！触れてみよ！これはただの包丁ではな

い、芸術だ！」

白金：「いやいや、ただのゴツい包丁ですよ

ね？これ、絶対料理には向いてないです

よ！」

剛田：「白金くん、物事は表面だけで判断し

てはならない。この輝きに込められた職人の

魂を感じないのか！」

（剛田が熱弁を始め、お客が呆然とする。）

第三幕：実際に使ってみる（25分）

（剛田が包丁を持ち、キッチンへ向かう。）

白金：「ちよ、ちよっと待ってください！剛田

さん、まさかそれ使う気ですか！？」

剛田：「もちろんだ。この包丁の真価を試さ

ずしてどうする。」

白金：「いやいや、割れたらどうするんです

か！石ですよ、石！」

剛田…「白金くん、リスクを恐れているのは美の本質には辿り着けないのだ。」

白金…「いやいや、そんな哲学いらなから！
傷ついたらどう責任取るんですか！」

剛田…「安心したまえ。この剛田が持つ以上、何も傷つけはしない。」

（豆腐を取り出し、剛田が慎重に包丁を振る。）

白金…「やめてってば……ああっ！」

剛田…「……見よ、この断面！」

白金…「……切れた！？そんな馬鹿な！」

剛田…「ただ切れただけではない。この滑らかさ、輝き。これをゴージャスと言わずして何と呼ぶ！」

エピローグ…ゴージャスな豆腐の味（五分）

（切った豆腐を剛田が食べ、深く息を吸う。）

剛田：「……うん、ゴージャス！」

白金：「だから味に“ゴージャス”ってあるんですか！」

剛田：「白金くん、これが芸術の力だ。

食べてみたまえ。」

白金：「（しゅしゅ一口食べて）……う、うまい！？なんでこんな滑らかな食感なんですか！」

剛田：「それがこの包丁の力だ。ゴージャスの世界へようこそ。」

お客：「こんなことになるとは……祖父も喜ぶかもしれません。」

白金：「いや、こんなの普通じゃない

……！」

剛田：「普通である必要などない。ゴージャスタレ！」

全体構成と尺割

1. 第一幕：豪華な朝の始まり（20分）

目的：キャラクターの個性と設定を紹介し、作品のトーンを示す。剛田の「ゴージャス」な性格と白金の常識人としての立ち位置を描く。

ポイント：

- 剛田の優雅な日常と哲学（紅茶、静かな朝の時間を強調）
- 白金のツツコミ役としての存在感（剛田の過剰な振る舞いへのリアクション）
- お宝への期待感を煽るための伏線。

2. 第二幕：謎のお宝登場（25分）

目的：物語の核となるアメジスト包丁を登場させ、剛田の熱弁と白金の困惑

で笑いを生む。

ポイント：

- お宝（アメジスト包丁）の登場とその特徴（美しい輝き、用途不明な実用性の低さ）
- 剛田のゴージャス哲学が全開（包丁を「芸術」と呼ぶ、熱弁する）。
- 白金の一般常識と剛田の価値観の衝突（剛田の極端な発言に振り回される）。
- お客の反応（驚きつつも徐々に剛田のペースに巻き込まれる）。

3. 第三幕：実際に使ってみる（25分）

目的：アメジスト包丁の真価を実験し、さらに笑いを生むシーン。物の価値をめぐる剛田と白金のやり取りが見どころ。

ポイント：

- 剛田が実際に包丁を使い、豆腐を切る実験を開始。
- 白金の大反対（壊れそうな包丁を使うことへの不安）。
- 包丁が実際に豆腐を切る驚きの結果と剛田の「ゴージャス！」な評価。
- ここで包丁の実用性ではなく、「美的価値」が強調される。
- 笑いを交えながらも、包丁の特別な感を印象づける。

4. エピローグ：ゴージャスな豆腐の味（15分）

目的：物語を感動的かつコミカルに締めくくる。「美」によって食材の味まで変わるという剛田の信念を描く。

ポイント：

○ 切った豆腐を試食する剛田と白
金、そしてお客。

○ 剛田の「ゴージャスな味！」という
発言をオチに、笑いと感動で締め
る。

○ 包丁を売る・売らないの話題は自然に
消え、作品全体の「ゴージャス哲学」が
主題として際立つ。